

氏名・(本籍地)	牛 黎 濤 (中華人民共和国)
学位の種類	博士(仏教学)
学位記の番号	乙第80号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	<b>チベットの社会と文化</b>
論文審査委員	主査 多田孝文 副査 蛭田道春 副査 多田孝正

## 牛 黎 濤 氏 学位請求論文審査報告書

### 「チベットの社会と文化」

#### 論文の内容の要旨

チベットの文化や歴史は中国(唐以降を含む)との交渉史を欠いては存在し得ない。しかし、中国側の文献資料を網羅することは日本人にとって非常な困難を伴う。その点牛氏は中国の学者であり、その方面での文献資料の取り扱いは日本人の及ぶところではない。そうした資料を駆使するだけでなく、日本語で論文を作成されたことは日本において新たな見解をもたらすこととなり、日本語の通じた牛氏ならではの成果を上げている。

チベット自治区は、中国で民族自治を実行する五つの自治地方の一つであり、チベット族を主体とするが、他十数民族が代々住んでおり、メンパ族、ローパ族、ナーシー族などの民族郷が設置されている。チベットは1965年に自治を実行したことで、封建的農奴制の社会から社会主義に入った。しかし、今でも中国の中では経済的に立ち遅れた地域である。一方で、チベット族は、悠久の歴史を持つ民族である。チベット人は一つの種族から成り立っているのではない。形質的には複合しており、それを一つに結び付けているのは、チベット語とチベット仏教、さらに苯(ボン)教であると言われている。

チベット族の歴史における社会的な変遷を研究するにあたっての問題の所在は、社会における民衆の要求、例えば彼らの理想や原則などが、いかに社会生活の各分野に貫かれたかということである。

本論は、チベット文化圏の社会について、歴史や人口・家族・教育・宗教・経済・葬送儀礼・文化生活などを含めて、多岐にわたる分析を試みようとするものである。チベットの社会システムや文化がいかに仏教の教えによって動かされているか、特に人生儀礼に対して、仏教はどんな役割や意義を持っているのかについて、多角的に検討するものである。さらに、チベットと中国の数少ない調査報告書を精査することによって、チベット社会の文化と家族に関する歴史的記述を日本に紹介することも、目的のひとつである。

中国のチベット社会学研究を見ると、50年代初めより中国の学者によってチベットの社会・政治・経済・歴史・言語・文化などの大規模な調査が行われた。もちろん宗教の研究が第一だったのだが、社会学者に

とつても、その文化と社会の発展が非常に価値ある研究素材となったのである。

総論である第一章「中国における社会学」では、中国社会学の由来とチベット学との関係、またチベット社会学の研究実施状況とその特徴を分析し、その形成理由について考察するものである。

第二章「社会体制と歴史」では、チベットの宗教と社会体制を中心に、チベット族の社会が歴史上どのように展開し、現代社会の中ではどのような方向に進んでいるのかを考察するものである。

第三章「人口増加と移動」では、チベット族の歴史を見るとともに、人口の変遷が極めて重要であることを検討する。

第四章「家族制度と生活」では、中国政府による貴重資料に基づいて、チベット族のさまざまな結婚形態と婚姻習俗をまとめ、特に過去の伝統的なものから民衆改革前に至るまでの多彩な姿について概観した。

第五章「人倫と社会的道徳」では、チベット族の人倫と社会的道徳観を述べたものである。チベット社会では、「一般民衆」と「貴族階級」といった社会的な階級だけでなく、「農耕生活者」と「牧畜生活者」とで、生活様式の違いによる相違が存在する。本章ではチベット族の近代社会（13世紀～19世紀）における、チベット族の自由恋愛と家庭内の道徳観について考察している。

第六章「仏教の教育システム」では、文化の基本的な理解に重要な意味をもつ教育、チベット教育の原点としての寺院教育をとりあげる。本章ではチベット仏教寺院の組織と、「宗教教育」「経堂教育」とも呼ばれる寺院教育の社会的な変遷と展開を検証することでチベット族における教育の変遷を考察する。

第七章「仏教の経済システム」では、チベットの寺院経済はどのような社会背景の下で誕生し、どのような発展をたどったかを中心に、チベットにおける寺院経済について論ずるものである。

第八章「葬送儀礼」は葬送儀礼について取り上げる。社会学的・民俗学的・宗教学的の先行研究は、家庭と結婚に対する研究を進めながら、葬送儀礼研究は盛んではなかった。そこで本章では、死に関わる儀式行為における慣習、信仰に表現された文化的均質性についても論じた。本論は中国社会における儀礼の役割を手がかりとしてチベット民族の葬儀儀礼について考察したものである。

第九章「チベット社会と仏教」では、寺院はチベットの政治・経済・文化・社会のすべての機能をもち、社会の中心をなしていたことに着目した。本章ではチベット社会に仏教がどのような影響を与えたのか、また仏教がチベット社会のどのような障害となったのか、そこに浮かび上がる問題を指摘したものである。

附論「チベット仏教研究の回顧」では、本論第一章の継続研究としてチベット仏教研究の現在までのまとめと解説を整理研究したものである。

## 審査結果の要旨

日本の仏教研究にチベット仏教の分野がある。それはインドから持ち込まれた多くの梵語経典が存在し、そのチベット語訳本も存在することから、主として仏教の深遠な哲理を究明することに力が注がれている。よって、チベットの文化や民衆との関係について言及することは少なく、特に現況についてはほとんど知ることが出来ない。本論文の提出者である牛氏は中国で基礎教育を受け、日本において望月嵩先生の指導のもと社会学を修め、総合佛教研究所の講師として長年活躍してきた気鋭の研究者である。現在も諸研究の成果を踏まえ、幅広くチベット社会の文化を解明しようと努力してきた。

13億人を超す中国人の中で、チベット語を話す人口はわずかに581万人程だといわれ、そのため積極的な研究の対象とならず、あらゆる分野での誤解が生じて来た。しかし、中国文化とチベット文化の間には多くの歴史的つながりを見出すことが出来、その文化の共通の基盤となっているものは仏教の概念であ

る。文化や社会の根底に仏教の思想が存在し、人間の善悪に対する認識と評価が仏教を通じて反映していると感じる。

論者はチベット仏教そのものの研究は多い中、社会学の観点からチベット社会の文化と家族を研究し、特にチベット族の人生儀礼に関する言及はほとんどなされていない現状を打破しようと試みた非常に斬新な研究論文を作成した。

例えば第四章「婚姻習俗」、第六章「寺院教育」、第八章「葬送儀礼」などは非常に興味ある章である。論者は次のように述べている。

チベット族の婚姻習俗は、古代より先人による生活の中で相応の礼儀が作られ、吐蕃の時代には定型化されたものとなってきた。結婚形態は地域によって多少異なるところがあるが、長期に亘ってチベット地域において行なわれていた「一妻多夫」という結婚形態は研究者の関心を引き起こした。この問題についての調査・研究は歴史資料と実地調査資料が不足しているため、中国国内ではまだ研究は十分ではない。しかし近年、海外でチベット族婚姻研究の論文が発表された。論者は中国語文献とこれら海外研究とを結び付けて、チベット族の「一妻多夫」という結婚形態に対し再検討を試みた。

10世紀以後、比較的大寺院には顕教・密教学院が設けられていたばかりではなく、因明学院や医方学院、時輪学院も設けられていた。寺院において、大小五明（学科・知識）と呼ばれた天文・論理・歴史をはじめとし、言語・工芸・医薬・文学・芸術などの知識を学習し、様々な分野の学者、知識人となり得た。寺院の文化教育を担う期間としての再検討を考察した。

チベットにおける葬送儀礼は、天葬・水葬・土葬等が伝統的に伝わってきた。吐蕃時代以来、葬送制度は土葬を主とするものであったが、反乱による墓の盗掘がきっかけとして、天葬が次第に広まり、土葬制度に代わったのである。また、葬儀の等級を考えると、塔葬と火葬は贅沢であるため高級ラマ僧と高級官僚に限られるものであり、水葬・土葬は辺鄙な地方に限られるものである。これに対し、葬儀の等級として火葬と水葬の中間に位置する天葬は、金銭的には塔葬や火葬を行えないが、「死後の昇天」という願望を持つ一般民衆に希求されたのである。この独特の神秘的な葬儀風習の発生と展開には、社会的影響によることが大きい。よって天葬に対する研究は、チベット民族の歴史に対する理解と、社会の発展に対する認識を深めることになるのである。そこで、近年の調査によって得た資料や状況に基づき、またいくつかの先行研究を参照しながら、天葬に関する諸問題について分析したものである。

チベット民族は、多彩な独自の文化を創造してきたが、チベットは古来より謎が多い地域と伝えられ、その国情の真相は多く世に知られてこなかった。しかし、チベット文化は時を追うにつれて内外の学者の関心を惹きつけ、チベット学は国家や民族の壁を越えた国際性を有する学問に発展してきた。殊に1950年代の初めより、中国の研究者はチベットの社会・政治・経済・歴史・言語・文化など様々な分野において大規模な調査を続けている。

社会学の分野においても、世界各国の研究者による研究が徐々に盛んになりつつある。論者もチベット社会学に関する研究を数年にわたって携わってきたが、以前は紹介されていなかった調査資料を示し、それに基づいた考察をすることに主眼を置いてきた。本論はその研究の成果として、貴重な中国の調査資料と海外の文献とを合わせ、先行研究にはない広い視野に立ち、チベットの社会と歴史について、人口・家族・教育・経済・宗教・葬送儀礼・文化生活などの様々な側面から総合的に論ずるものである。

歴史的な問題に関しては古代より近・現代までの中国政府関係資料を利用し、問題点を整理した。チベットの研究において、これまでは欧米の学者によるものが中心であったが、その中ではこの中国政府関係

資料はほとんど扱われていない。したがって、従来注目を浴びて来なかった資料を出来るだけ多く示すことにより、より広い視点からの考察が出来るようになった点は、本論の大きな特色であるといえる。

本論はチベット文化圏の社会の歴史や人口・家族・教育・宗教・経済・葬送儀礼・文化生活などを含む多岐に亘る内容を持つ。チベット人がチベット文化をどのように見ているか、社会システムや文化がいかにより仏教によって動かされているか、人生儀礼に対し仏教が持つ役割や威儀は何か、また家族とは何か等を広範囲に考察したため、論究の及ばない点も見られるが、博士論文として十分認め得るものである。